



大和の大型前方後円墳

(橿考研創立 80 周年記念講演より)

坂東 久平

6月10日に橿考研にて、関西古代史界の第一人者である、白石太一郎先生(註1)の講演があった。ヤマト王権初期の6基の大型前方後円墳を中心に、従来の学説に加えて先生からの提案などを交えたお話を拝聴した。

6基の古墳は、北から西殿塚古墳(衾田陵)、行燈山古墳(崇神天皇陵)、渋谷向山古墳(景行陵)、箸墓古墳(大市墓)、桜井茶臼山古墳、メスリ山古墳である。築造順序については研究者の意見は一致しており、箸墓→西殿塚→桜井茶臼山→メスリ山→行燈山→渋谷向山の順が定説となっている。

これらの古墳が王墓か否かについては諸説があり、白石氏は全てが王墓、石野氏(註2)や塚口氏(註3)は桜井茶臼山とメスリ山を外す。岸本氏(註4)は聖俗二重王制を唱え、箸墓、メスリ山、行燈山が祭祀王の、西殿塚、桜井茶臼山、渋谷向山が執政王の墓としている。

白石氏はヤマト王権の初期は聖俗二重王制で、1代目、2代目までは、祭祀王が卑弥呼、台与で、3代目からは二重性は解消し、男子の執政王のみとしている。

(聖俗二重王制とは、祭祀王(女)が神を祀り、執政王(男)が政治・軍事を執り行い、二人の王が国を治める)

墓の被葬者については、箸墓は卑弥呼であり、根拠として、卑弥呼の没年が247年(魏志倭人伝)で、箸墓古墳築造時期が250年頃と推定されること挙げている。

西殿塚は台与と執政王の合葬としている。古墳の後円部と前方部にはほぼ同じ大きさの方形基壇が認められており、発掘調査は未了であるがこの下に埋葬施設があると推定している。ここに、台与

と執政王が葬られている。

3代目：桜井茶臼山、4代目：メスリ山には、宗教的権威と政治・軍事的権威を掌握した一人の執政王が葬られている。

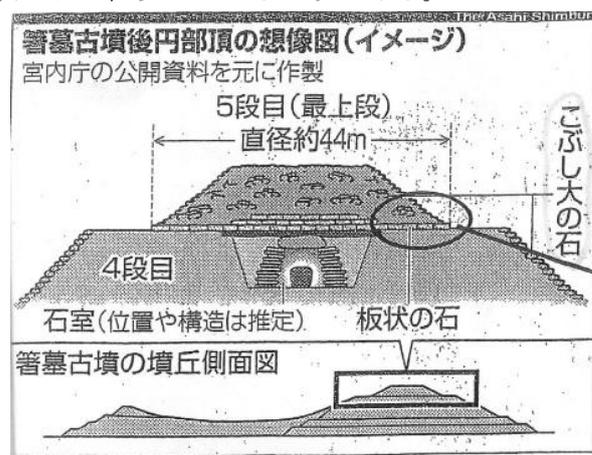
5代目、6代目に相当する行燈山と渋谷向山は、記紀の記述などから、崇神天皇、景行天皇の墓である可能性が高い。

桜井茶臼山からは、81面の銅鏡破片が出土した。全てが破壊されている理由について、白石は埋葬時に既に破壊されていたのではないかと考えている。北九州糸島の^{ひらぼる}平原遺跡・平原1号墳からは、40面分の破壊された銅鏡が出土しており、類似性がある。

最初の大和前方後円墳は箸墓古墳であるが、宮内庁は^{おおいちのはか}大市墓・^{やまとととひももそひめ}倭迹迹日百襲姫命の墓に治定しており、立ち入り調査や発掘が許されていない。

しかし、宮内庁職員による調査で、宮山型特殊器台・特殊壺、最古の埴輪である都月型円筒埴輪などが採集されており、これらが墳丘上に置かれていたと想像される。

また、宮内庁が50年前の調査結果を公表している。これによると、後円部頂上部分が前面に石を厚く積んだ特異な構造であることがわかった。また、5段目の円周は44mで、4段目との境を板状の石で仕切っているようである。



これらの古墳の主が誰なのかは別として、古代史オタクにとっては、ロマンの塊であることはいうまでもない。

(註)

1. 白石太一郎：大阪府立近つ飛鳥博物館館長
2. 石野 博信：香芝市二上山博物館館長
3. 塚口 義信：香芝市文化財保護審議会会長
4. 岸本 直文：大阪市立大学教授